

「磯山千鳥」と「下馬のおとなひ」

岩 本 堅 一

幕末を約五十年、明治を二十年生きた国語学者堀秀成は、その専門とする所の多数の国語学に関する著述のほか、なほ幾種かの紀行または隨筆風の文芸的作品を残して居る。その草津繁昌記と云ふものは面白さうに思はれるが、私は未だこれを見て居ない。ここには「磯山千鳥」と「下馬のおとなひ」の二種を取りあげて考察して見たいと思ふ。この二篇は共に寥々たる短篇に過ぎないものであるが、先づ作品そのものの上から、又学者の書いた文芸作品としての上から、又かかる作品の文芸上の地位、他の作品との關係、作者の資質その他の点からも考へて見たいと思ふ。

「磯山千鳥」は作者の自序によると、秀成が治病のため伊豆の熱海に遊んだ折、甚だ徒然であるから何事か書き試みようと思つたのだが、もと／＼病を養ふ爲に来て居るのであるから、思ひを凝らして考へなどすべきでは無い、自ら心を慰むべきたはれ文を書かうと思つて筆を執つたと云つて居る。それで最初は先年書いた草津繁昌記に対して、熱海繁昌記を書かうかと思つたのであるが、この熱海と云ふ所は、草津の湯のやうに目覚ましく花やいだ事も無いので、有りの儘に書いたなら何の珍らしい節も無からうと思ひ直し、その代りに幾度か往復した事のある東海

「磯山千鳥」と「下馬のおとなひ」

道駅路の有様を書かうと思つて出来たのが此の一篇であると記して居る。今の熱海は歓楽都市として賑つて居るが、慶応二年、この篇の書かれた頃の熱海は、草津に比べると遙かに劣つて居たと見え、最初の思ひつきを捨てたのであつた。さてこの自序の中に注目すべき事は、「いとつれづれしさの余り何事を書き試みん」と思つたと云ふ事であり、又「心なぐさむべきたはれ文かきてむと思ふ」と云つて居る事である。即ち病余の閑文字であり、業余の戯文である。つれづれなる儘にといふ、中世以後の隨筆の極まつた型を取つて居、これを「戯れぶみ」と見もし、又その様に書いて居る事である。更に今ひとつ注目すべき事は、幾度か往復した東海道駅路の様を書かう、と思ひ立つたと云ふ条に、「まのあたり見し儘に、さびたるわざをも厭はず書かむとて」と記して居る事である。作者秀成の心には、当時の古い文人などの間に猶残つて居る、いはゆる綺麗ごとを書くのでは無く、卑俗な事をも厭はず有りの儘に描写しようと思つた事である。要するにこの「磯山千鳥」はかかる作者の態度のもとに作られたもので、尙「磯山千鳥」といふ名称は、目録のはしに書いた「あとをしも留むべきにはあらねども、心なぐさの磯千鳥かな」と云ふ歌の心によつて名づけたものである。然しこの「磯山千鳥」は東海道を上り下りした紀行風に書いたものでは無く、問屋場、旅宿、雲助、飯盛、宿引、茶屋、旅人、の七章に分けて、それづゝ其の機構や状況を詳細に説明し描写して居る。作者そもづゝの態度が立体的に書かうとしたもので無く、平面的説明的に書かうとしたもので、是は彼が所謂戯作者畑の人で無く、純然たる学者畑の人であつた為でもあるが、それにも拘らず、その精細な觀察と巧な描写の筆は、平面的なものから立体的なものとなり、單なる説明の域を離れて喰ひ入つて核心を衝いた叙述になつて居ると云ふ所に、この作品の玩味すべき価値を認めるのである。

最初の「問屋場」と云ふ章は、当時の問屋場の位置や構への様子を精密に描写し、四角な火鉢の縁の焼けて居る

所から、その構への庭が道幅よりも広い事まで書き落さず、殊に問屋年寄の下に実務に當つて居る帳付けと称する者の、物馴れて萬事を振舞ふ様子を、「さがな事いはゞ、馬をも人をも筆の頭もて吞むとか云ふらんわざなどは、いみじうさかしき方なれど」と云つて、その物に馴れ人に馴れ切つたすれからの様子を記し、この帳付けなる者が、雲助は更にも云はず、助郷の丁どもを自分の下部の様に扱ひ、諸侯の家人、大方の役人達の人馬を継ぐ為に其処へ来る者をすべて物の数とも思はず、平気で待たせて置いたりする有様を実写して居る。

次の章の「旅宿」は場面も複雑多趣で写し甲斐もあるだけに、描写は更に精細である。本陣の構造は云ふ迄もなく、通行の旅人を呼び留める下女下男どもの様子、又権勢ある主人の威光を笠に着て兎角威張りたがる諸家の侍を、「ともすればあるじを呼べなど言ひ威しなど」する可笑しみ、さては貧乏臭い客、茶代をはずむ客、それ／＼その様に扱ふ宿屋の如才なさなどを書き分け、法体の客に膳を出すとは、元より其の生臭を好む事を知りながら、生臭と精進と、何れにすべきか等と問ひ質し、又精進と称しながら黙つて生臭をつける扱ひなど、読む者をして失笑せしめる。又風呂場の光景、客の背を流しに出る下女とのざれ言、座敷に戻つてからの食事の様子、下女が「いざきこしめせ、今一椀きこしめせなど云ふ」と客は「いかにおのれ等は信濃の国より来し人とか見ゆらむ。飯櫃の掃除に来しやうに覺ゆらん」などと云ふ遣り取りも既に石川雅望の「都の手ぶり」の中にも描かれて居る可笑しさではあるが、縦横自在、達者な描写である。それから旅の疲れの療治に來る按摩に更けて、襟垢の冷たい夜の物、はてはそれに隠れ住む「かの紙喰ふ蟲に似たる」物の佗びしさ等まで書き尽して居る。

「雲助」といふ章は極めて短いが、よく雲助の特徴をつかまへて居る。その風体、住居の有様から、時代の違つた今日になつては一寸分り憎い彼等の仕事の上の等級、斯かる階級に成り下る幾種かの徑路、更に又、これ等の

仲間には互に呼び交す時には、薩州、加州、因州などと其の郷国を呼んで、まるで諸侯の交りの様だと云ふ可笑しみをまで書いて居るのである。この項の文章は酷く対句の多いもので、俳文、洒落本、その他一般に多く現れて居る近世の文章特有の調子で、この雲助を叙しては、「肩に置ける手拭とふどしの色は、等しく黄昏の色に通ひ、顔と体の色は赤く巳の時の色に同じく、髪は猪のかしらに、手足は松の木に似たり」と云ひ、又、「飯はどんぶりといふ物に盛りたるを食ひ、酒は茶盃につぎて飲む。ばく(博奕)に勝てば小屋に在り、ばくに負けては役(えだち)に出づ」と云ふ調子である。

「飯盛」の章はその名称の起り、海道各地の飯盛女の品定め、桑名では上下の等級を赤字黒字と呼ぶ様な細かい事や、その理由、又一般の此の種の女の上中下の品定め、客の等級など、短い章の中にも限りなく記し、殊に是等の女の自堕落な姿態、客無き昼を大勢ごろ／＼と寐そべつて居るのを「かの海驢(あしか)島に行きたらむやうに」と云ひ、又客に招かれて座敷に出た折の様子を、「直ちに火桶のもとに座り、客人の煙草とりてくゆらす。二人三人など其のむしろに出づる時は、おのがどち互にその徒のしりう言など」云ふ、と云つて此の種の女の特徴を擷んで写して居る。

「宿引」の章では、その宿場から七八町、もしくは十町も出て客を引く事、今の午後四時になると籤引で互に順序を極める事、宿引きの極まり文句、又、日が高いから先の宿駅まで行くと云ふ客を引留める常套語、物馴れて客を見分ける彼等の眼の鋭さなどを記して居る。

「茶屋」の章は、大体旅宿に同じくして又異なる其の店構へを説明し、流し板の前に障子を立てゝ居る店の様子、その上方に鍵を吊るして色々の魚を懸けてある有様を「わたつみの都にはりつけ」と云ふ刑罰ものしたる様なり

と人の言ひけるはうべなり」と洒落れ、おしろいを塗つた女の客を呼び留める口上、此処で草鞋を替へ荷物を結び直し、或は又駕籠を出て奥へ通る上の客の様子、昼酒に少し浮かれて女中に戯れ言いふ客の言葉等、道中の休み茶屋の光景を写したものである。

「旅人」の章は、公私さまの用向を持つ旅人の、それの姿、言葉、その中にも慶応と云ふ時代の物価の高くなつたのを數く、天秤棒を肩にして行く旅商ひ連中の愚痴、深い笠を冠り合羽の裾を端折り、白い脚絆を穿いた僧侶たち迄が、物の価の酷く吊り上がったのを數息し乍ら行く様子を写し、駕籠に乗つた武士と駕籠かきとが、矢張り是も物価高直の問答に、駕籠屋がこれでは家内三人口も養ひ兼ねるとこぼすのに対し、武士が、世の中が斯うなつて上中下ともに鼎の内に煮られる魚のやうなものも縊れて彼の外夷を近づけた故だ、かう思ふと一日片時も安んじては居られない、此のごろ長門や常陸に事の起つたのも皆憤りの余りで、その憤りを言動に顯して忽ち刑にあふ者は夥しい數だが、この人々を以て国を守らせたら、四方の外夷數を尽して向ひ来るとも何事かあらん。可惜人を失つたのも皆この外夷の故だ、と駕籠かきを相手に悲憤慷慨して行く尊王攘夷論者、さうかと思へば又、菅の笠を目深に冠つた若い男に連れ立つた、旅の浴衣を赤い腰紐で高く揚げて、白い脛をちら／＼させて行く若い女、これも笠で深く顔を隠したのが、何やらひそ／＼話しては後ろを顧み勝ちなのも通る。幕末行旅の様を写したのが此の「旅人」の章である。

「下馬のおとなひ」は其の自序によると、秀成が伊勢の国五十鈴川のほとりに居た明治十四年七月に書いたものではあるが、その序にある通り、「——文政、天保といふ年頃の世の有様を思ひて、今の御代にあへる幸なる事

は覚ゆべし、されば其の頃と今の世の違ひたる事ども記し試みばやと早くより思ひし事無きにしもあらねど——」と云ふ事が、此の書の筆を執るに到つた動機で、「磯山千鳥」が眼前に見た幕末行旅の実写であるのに対し、これは更に早い時代の江戸風俗の一部分を写したものである。然し其れは普通の市井の風俗とは異なつて、諸侯や諸家が朔望または節日に、大手、桜田から江戸城へ登る折の雑沓壯觀の状を目に睹る如く描写したもので、其処には下馬札が立つてゐる所から此の書の名は附いて居る。下馬所のかまへ、諸家の行列、老若登城、供侍、下馬のくづれ、廻勤、諸家の帰邸、の七章から成つて居る。

然し単なる描写の文では無く、明治の代になつて見ると供揃ひと云ひ磐固と云ひ、その他みな馬鹿々々しく大袈裟なもので、著者はそこに感慨をこめて記して居るのである。序文の末に、「うち見てはさがなき色のこと草も根さす心の無くてあらめや」、とある一首も此の心を云つたものである。「磯山千鳥」の方の末には下野の人、日下田足穂の跋が附してあるが、この「下馬のおとなひ」の方には正臣拝草とある題詩が附いて居る。即ち、題下馬之於登那比と題して、才筆写真真個奇。想看霸府暴横時。行間且寓勤王意。作者胸懷自可知。とある。

「下馬所のかまへ」の章はその題の示す如く、精細に其処の構へを記したもので、下座見と云ふ足輕の長の、今から思へば不思議な職能や、その者の特殊な記憶力を記して居る。

「諸家の行列」には、大小の家々によつて違ひは有るが、謂はゆる金紋先箱の美々しさ、行列の人数、槍、乗物、これに侍して行く左右の侍の姿、先箱に対する後箱と称する物、簀箱と云ふ物、又美々しい茶弁当といふ物、これに従つて行く茶坊主の服装、乗り馬と乗替へ馬、これに続いて行く長々とした行列、これ等の夥しく仰々しい行列を記す中に、所々その馬鹿々々しさを嗤ふ皮肉な言辭を交へ、「いひもて行けば怪しからぬはあらざりけり」

と云つて居る。尙「さま／＼」なる中に、馬に騎り四人五人の供を具し、槍一筋なるもあり。只二人ばかり具して、かちより行くもあり」と云ふ甚だ見窄しい登城の者をも記して居る。

「老若登城」の章は、老中若年寄等が諸家の登城し終つてから登城する模様を記したもので、出発の折の光景、その途中、供の者が早足に足並を揃へて行く、所謂「きざみ供」と云ふもの、「遠見」と云ふもの、老中、若年寄が各所の道から行列を描へて、聴てひとつらに成つて下馬所に行く模様など、その描写は精細を極めたもので、その壯觀目に睹るやうではあるが、此処でも亦、「げに空飛ぶ鳥も落ち、堀に浮べる魚も驚くばかりなり。これを見れば天の下執り申すこの人々は、いかばかりなる人々にかあるらん。蓋し、諫めの鼓を苔むさしめ、九かへりの洪水をも治むべき器ある賢し人にかあらんと覺ゆ。かくて此の人々のうち今なほ長らへたるを見れば、思ひしには似るべくもあらず。世の常人よりもなど、世にしりうごとするはさもあらんかし」と痛罵して居るのである。

「供待」の章は大下馬に供待ちする者の様子を記したもので、それ等の者共の弁当の模様、菜はひじき、油揚げ、焼豆腐などである事から、香の物の切り方、樽に詰めた粗悪な茶、雨の日には冠つた笠の雫の弁当の上に落ちる佗びしさ等、徹底した写真である。供待のつれ／＼に見て居る物の種類は、上品なのは詩歌の横綴の帖、下つては芝居の番附、吉原細見などで、国々から江戸詰になつて出て来た侍の下馬見物に来て居る者の、立て並べた槍と武鑑とを引きくらべて眺めてゐる風体、所作。見物の老若の様子、また立売りの品々は蒔蕪の田楽、甘酒、清酒、すし、菓子。売り歩く物の一と声高く聞えるのは江戸絵図、年代記、よし原細見、御大名附、御役人附、御役人替改り。これ等の千品万物、千音万声を尽く写して、遠い後の世に生れた吾々に当時の風俗を伝へて居るのが此の章である。

「下馬のくづれ」、この章は登城果てゝ帰路につく状況を描いたもので極めて短い。

「廻勤」は節日に登城して賀儀を終へた人々が、道の次第に随つて老中の邸を挨拶して廻ることを記したもので、その中、諸侯ともある者が横道から出て来て一つ道に落合ふ様な場合、互に先を争ひ遅れまいとして、砂を蹴立てゝ走り合ふ可笑しさや、引きも切らず入り来る玄關先の混雑を写して居る。作者は附記して「かくばかり老中の人々にもものする卑屈さは、何の習はし何の心よりや起りけむ」と云ひ、「節日の礼ごとするに如何なれば斯くは荒くることならん」と嘆じ、国から出て来たての侍などが、突かれ転がされ、袴を破られ等する見苦しさを苦々しく描いて居る。

「諸家の帰邸」の章は稍長いもので、諸侯が節日の登城から帰邸し、玄關から奥に通るまでの順序、模様を手にとつて見る如く仔細に描いて居る。殊にお部屋と称する妾が、主人の留守に湯浴して磨き立てる光景、その道具立ての物々しさを写す所などは、微に入り細を穿ち人をして失笑せしめる。その夜、奥ではお狂言師を招いてお狂言と称するものを催し、笛太鼓琴三絃の大賑ひで、妻妾のほか老女、中老をはじめ女中達はもとより、奥家老、医師なども侍しての大酒宴となる光景を詳叙し、はては幫間医者戯れ舞に女中達が笑ひさゝめく模様を描いて居る。然し作者は「すべて言ひ続ければ言さがなきものから、いはゆる僭上の罪のがれぬ振舞ならずと言ふ事なし」と慨いて居る。以上が「下馬のおとなひ」の各章に描かれて居る大略である。

以上甚だくくしくは有つたかも知れないが、是等の作物は余り多くの人々には読まれても居ないと思つて、その梗概を述べ併せて其の特長をも大略記して置いたのである。顧みて此の二ツの篇の特長を見ると、先づその文

章の擬古文であつて、解し難い事は先行して居る同じ種類の作物、石川雅望の「都の手振」と同じである。国語学者である以上は誰も広く古人の書いた作物は見て居る筈である。特に秀成は博学で有つたと伝へられて居る。彼の文章は如何にも自由に古語を駆使して居ると同時に、古典中に使はれて居る語句に至る所に時き散らし、又古典に現れて居る或る事柄の、ほのかな匂ひや面影を所々に發散させたり臙げに浮き出させたりして居る。即ち学者的臭味が強く匂つて居るのである。「磯山千鳥」の如き、既にその構成は自己なり架空の人物なりを写す所の駅路の上に立たしめないで、駅路の情景を項を分けて説明し叙述して居るのである。分類し整理し詳述する所に学的臭味が出て居るのである。

先づ冒頭の「問屋場」にしても、「問屋場は古の早馬所といひ、そを司るを早馬吏といふ。問屋といふ名はもと湊より転じたる名なるべし。川水の海に落つる所を湊といひ、すべて舟の着く所を津といふ。その津にて荷を扱ふ家を津屋とはいへるなり。さてこの津屋の津を仮字に鬩(つ)と書きけむを、その鬩の字を草書に問と書き誤りて、つひに問屋とはなれるにもあるべし」と記して居る。問屋といふ語に就いての此の考は勿論異説も立て得る事ではあるが、彼はその語学者らしい立場から自分の説を斯うも書いて居るのである。「旅宿」の章でも、「はたご」といふ語の起り、「飯盛」の章では古代の「くどつ」から説き起して居る。「茶屋」の条では先にも記した通り、大小の魚を鍵に掛けたのを「綿津見の都には、つけと云ふ刑罰をものしたるやう也」と云つて居るのであるが、大小の魚と云はずして、鱧の広物、狭物と祝詞の言葉を使つたり、「茶を出す」と云ふべきを、「宇治山木の芽の汁などさし出で」とやつて居る。学者の書いた雅文体の面白いものとしては石川雅望の「都の手ぶり」があり、秀成の作に先行して極めて優れたものである。それは江戸の市井を描いて巧を極めて居るが、秀成の筆をも時

に雅望を凌駕するとまで褒める人も有つて、成る程、短い章句の間にはそれは言ひ得る事である。然し何分にも秀成の残した作品の今日読み得る物の甚だ少いのを遺憾とする。

もし秀成が是等の作を業余の閑筆とせず、力をこめて沢山の作品を残して居たら、或は雅望のものと双壁を為し得たかも知れない。それにしても、両者とも雅言で書いた為に学力の程は敬服されるとしても、又卑俗の事柄や言葉、逆に雅言を用ゐて写したといふ所に、矛盾から生ずる可笑しみを加へたと云ふ事は有つても、文芸作品としては必ずしも之は有効に成つては居ない。これは学者であるから難解な古語を用ゐたと云ふ丈で無く、学芸と一口には云ふものの、芸よりは学の方に天秤を傾けたからである。それ故業余の閑筆とも称し、又戯れ文とも云ふのである。雅望の方は狂歌師でも有り、又江戸市民は総べて洒落や滑稽を愛し、滑稽文学は此の期の文学に重要な地位を占めて居る。それ故当然滑稽の文字を作る事が有つて宜しい訳であるのを、猶當時の文学者が戯作者と稱しも称されもし「業余」に隠れたり「戯文」に逃げたりして、正面から人間を書き、世間を描き、市井を写さなかつたのは、士君子は斯かる作物を造るべきで無いといふ堅苦しい思想から来て居るのである。写実と云ふことが又これに關聯して来る。物真似、仕方話を卑しいとして見る事は、やがて又それを写すことをも卑しいとする事になる。秀成は別として雅望は小説も書いて居る。それは雅言体のものであつた。人物の言語動作の精密な描写を必要とする小説を書く場合、やはり戯作として逃げ学業の余のものとして居る。雅望は源氏物語の優れた研究者であつた。源氏物語は平安当時の言葉を以て書かれて居るのに彼は江戸の言葉で書かず大時代の雅言古語を使つたのである。秀成の場合も亦同じい。彼も亦「磯山千鳥」の方は堀秀成著として居るが、「下馬のおとなひ」には琴舎戲著と題して居る。琴舎は秀成の雅号の一つである。然し学者で有つた為に、自然と物を仔細に觀察し、これを分類し

たり整理したりした事は（これは悪い場合も有るが）確にその作物を粗雑空疎なものたらしめなかつた効果を齎しては居る。秀成の行旅を写した「磯山千鳥」にしても、又江戸の特殊な光景を描いた「下馬のおとなひ」にしても、その事が写真の効果を挙げしめては居る。学者と云ふ者と作者と云ふ者とは、両立し得るものでも有るが、又それは難かしい事でもある。泰西の文学や思想の洗礼を受けて純文学が尊重され、又その文学の中、小説が主流の様に見られて来た明治になつても、学者にして文学者であつた人々の多くは、最初から本格の小説には取組まなかつた様である。（尠くとも発表の順から見ると）初は隨筆風の物に隠れたり、戯著やうな物から出発しても居る。嘗に作る上の難易から此の順を取つたのでは無いと思ふ。雅望は稍異なるとしても、秀成の如きは寥々たるものしか書いて居ないし、雅望にしても、作家として見ると必ずしも學業以上の実績を示して居るとは言ひ切れないものがある。資質の上の問題でなくて態度の上の問題である。これに主力を注がしめたなら近江県物語其他の小説若しくは文芸的作品に顕れた丈の天分でしか無かつた、とは思ひたく無いのである。

今一つ考へて見たい事は、この秀成の二篇も雅望の「都の手ぶり」も、共に隨筆といふものゝ中に加へられて居る事である。既に明治の後期に入つて早く刊行された隨筆集、百家説林の中にも、後に刊行された隨筆大成の中にも、共に此の三つの作物は加へられて居る事である。尤も是等の隨筆集の中には「奥の細道」や「家屋雜考」など云ふものさへ加へられて居るし、其他百科の研究断片や考証様のものが加へられて居るのである。今こそ物事を余りはつきり分け過ぎる程に区別し分類する傾向になつて居るが、近き世までは作られた所の物も、それを作る所の人それ自体も、學問と文芸と一つに成つて居たのである。當時の人々は儒家であり詩人であり、芸術家にして學者でもあつた。秀成より十歳ほど若かつた學者の近藤真琴は博學な國學者であつたと同時に、蘭學者であり數學者で

あり、又航海の学にも通じた人である。大雑把な言ひ方をすれば、今までの東洋のものは、甚だ雑然とした所に短所と長所とを併せ有して居た様である。雅望も秀成も学者で有り文学者で有つた為に損をして居たとも云へる。寧ろ彼等に深い学殖と強い研究心が無かつたら、或は更に文芸に深く突き入つて多くの佳作を残して居たかも知れない。

寥々たる短章を並べたに過ぎない秀成の「磯山千鳥」は、これを有名な一九の「膝栗毛」と日を同じうして談ずべきで無いかも知れない。然し所によつては決して遜色を見ない觀察も描写も有るのである。「膝栗毛」は当時非常な人気を呼び、後篇に繼いで後篇を加へ、今猶多数の愛読者を有して居る。尤も是とて今日の読者に取つては、辞句や事柄の上に幾多の註釈を要する事では有るが、あれ程面白い「都の手ぶり」にしても、所によつては今の大学卒業者も幾度か頭を捻らなくては成らない所がある。故事や古歌を踏んだ所は勿論の事である。

秀成の物にしても目遠く耳遠い所が多く、可惜、面白い事柄の描写を不通にさせて居る。純文芸的作品としての価値を計量される以前に、既に此の難点を持つて居る。尤も語句文章が解し難いと云ふ丈で低く見る事は出来ない事は勿論である。時と場所と相距る遠い所の作品の難解なのは言ふ迄も無い。外国の作品、古い時代の作品すべて一応は難解である。要は作者の文芸に対する態度であつた。人なり事なり、書かうとする対象に絶対の価値を認めて真剣に取組んで行つたか、それとも学問その物に対するのとは違つて、これを第二義的に観て居たか、即ち單なる業余のものとして、又は面白づくで書いて居たかによつて別れる。秀成の作なり又雅望の作なり、よき素質のもので而も今の所謂純文芸的でない作物に接する場合、いつも此の感を深くするのである。